

優秀賞

高校生部門〈自然災害〉

岩手県立大船渡高等学校2年

村上 ひな

記憶の中に

「生きる」って何だろう。生命を維持すること。心臓が動いていること。果たして本当にそれだけなのだろうか。私は、「生きる」とは「人の記憶の中に残り続けること」だと思う。著名人は、たとえ亡くなっても一般人の人よりずっと長く生き続ける。しかし、著名人に限らず、生き物でも、景色でも、なんだって、たった一人の記憶に残ってさえいれば、それが生きることではないだろうか。

五年前、私達は沢山の物を失った。私の周りにも家族や家を亡くした人が多かった。幸い、私は家族を失わなかった。私が失ったのは思い出である。私の住む町は半島なので海に囲まれている。夏になると遠くからも人が来るほど人気の海水浴場があった。家から小学校までの登下校は結構長くて辛かったけれど、何より自分の住む町並みを見るのが好きだった。他の地域に比べれば田舎。でも帰りに公園に寄ったり、友達と遊びながら帰るのが楽しくて仕方なかった。

震災があったのは私が小学五年生の時だ。商店街も、公園も、好きでたまらなかった景色が、全部無くなってしまった。悲しかった。まるで違う町にいるかのようにだった。次の年からは安全のために登下校はスクールバスになり、いつも三十分かけていた通学は十分程度になった。商店街のあった場所にもう一度同じ光景が戻ってくることはないそうだ。

一昨年、同級生と小学校までの道のりを歩いたことがある。彼女もあの時の景色を覚えていたようで、何だかとても嬉しかった。今年の夏に同級生が集まった時にも、思い出話に花が咲いた。皆忘れていなかった。震災前のあの景色は今ももう戻ることはない。でも確かに私達の中で生き抜いている。決して色褪せることなく、記憶の中に残っている。今でもあの道を通ると、鮮明に思い出せる景色を、私は忘れることはないだろう。輝くような日々は、心の中で今を生き抜いているのだ。